

根津鋼材が物流機能強化

ヤード拡張、トラック増車

大手コイルセンターの根津鋼材(本社=東京都荒川区、根津訓光社長)は物流機能の強化と加工体制の最適化を推進する。今月、八潮事業所(埼玉県八潮市)の近隣に「八潮物流センター」を開設したのを皮切りに各拠点で在庫保管能力を増強。トラック保有台数は現在の36台から数年かけてさらに増やす。加工設備については老朽化した八潮の大型スリッターラインを今月末で休止するなど、関東の4拠点間で加工移管や設備集約を進め、捻出したスペースをコイルヤードに改修。関東だけで新たに340本分の母材コイル置き場を確保する。

八潮スリッター設備統廃合を推進 今月末で休止

コイルセンター事業の基本であり、サブライチェーンの毛細血管としての役割を担うためのストック機能と運

送機能にさらなる磨きをかける。コイルセンター業界の長年の課題である余剰設備の廃棄にも前向きに取り組む

ことで、DX(デジタルトランスフォーメーション)や自動化など、必要なものへの投資を集中的に行っていく(根津社長)。

同社は10年以上にわたる積極的な自動化・省力化投資やITの活用によって、各ラインの生産性が向上し、老朽化設備の集約が可能となった。

ここ数年で浦安事業所(千葉県浦安市鉄鋼通り)と須賀川事業所(福島県須賀川市)、八潮ではシャーリング機を1基ずつ、相模原事業所(相模原市)ではミニスリッター1基、



撤去する大型スリッター(八潮事業所)

野市)ではミニレベル1とシャーリング機を1基ずつ廃棄。今月は八潮の大型スリッターに加え、須賀川事業所でもミニスリッターを撤去する。

一連の設備集約を実施後も同社の加工量は減少しておらず、現在

は年間24万ト強と、この10年でも着実に増加している。設備集約は客先との調整などに労力を要するため、容易ではないが、「鉄鋼メーカーが構造改革を進めている中、われわれも筋肉質になっていく必要がある(同)。



新設した八潮物流センター

ここ数年で浦安事業所(千葉県浦安市鉄鋼通り)と須賀川事業所(福島県須賀川市)、八潮ではシャーリング機を1基ずつ、相模原事業所(相模原市)ではミニスリッター1基、

根津鋼材は1日から新設した「八潮物流センター」(埼玉県八潮市)の稼働を開始した。関東一円をカバーするシート母材・製品の供給基地として運用し、

物流効率化を図るとともに、他の拠点から在庫を移すことで、スペースの有効利用につなげる。

八潮物流センターは敷地面積1600平方

メートル、建屋面積830平方メートル、定尺サイズで最大500パレット分の保管が可能。関東4拠点に母材を供給する中継地としての役割も果たす。構内にはシャー

リング機を設置し、浦安事業所からも1基移設して、計2基体制で加工する。浦安のシャーリング加工の一部を八潮に移管することで、浦安での細かい切板の煩雑な積み込み作業が軽減され、出荷効率向上につながるほか、引き取りに来たトラック運転手の待機時間削減にも寄与する。根津訓光社長は「当社が引き取りに行った際に2-3時間

待たされることもある。まずは自社が待たせてしまう時間を減らせるようチャレンジしていきたい」と話す。同センターにはグループ会社の小山運輸が入り、全社でトラック36台が稼働する自社便の中央コントロール機能も担う。より機動的な運用の実現に向け、敷地内にはトラック10台分の一時待機スペースを確保した。

八潮の大型スリッター1で手掛けていた月間1500-1800トの加工は浦安と相模原、豊通鉄鋼販売からの事業譲受で4月から加わった青梅事業所(東京都青梅市)の3拠点で吸収する。一方、八潮のスリッター跡地はコイルヤードに改修し、母材コイル40-50本分の保管能力を追加する。浦安はシート母材・製品とシャーリング機1基を八潮物流センターに移し、レイアウト変更と合わせ、コイルヤードを100本分増床。青梅では構内の遊休スペース200本分を活用する。今後「さらなる設備の統廃合を検討していく(同)方針で、DXや自動化などの投資を加速させるなど、「選択と集中」を進める。須賀川や蓼科でも在庫ヤードの拡張を視野に入れてはいるほか、11月からは納品書の電子化を開始する計画だ。